

高津区おはなしアーカイブ

- 和田茂雄（わだ しげお）さん
昭和13年生まれ 78歳
川崎市宮前区野川在住



◆子どもの頃の思い出

昔はどこも大家族でね。私の家も両親と祖父母、叔父、叔母、そして私、私の姉と弟2人、妹1人の11人いましたよ。

農家でしたから、米や麦、きゅうり、トマトなどの野菜を作って市場へ出荷していました。当時は直売所なんか、なかったからね。もっともあつたって、人がいなかったから（笑）。朝早く家を出て市場へ向かうため、夜なべをして荷造りをしていました。今の小杉駅と元住吉駅の間に、昔は「工業都市」という駅があつて、その近くの市

場や新丸子、綱島、等々力の方の市場まで野菜を持っていきました。

子どもの頃は祖父が「うちには大人が一杯いるのだから、子どもは手伝わなくてもいい」と言ってくれていたの、学校を卒業するまでは殆ど仕事を手伝わされませんでした。祖母が生まれたのは明治19年、祖父は婿養子だったから、ものすごく働いたそうです。この辺りの土地、田んぼや畑も買ったようでね。働き者で頑固で、すごかった（笑）。わたしも学校を卒業してからは家の仕事を手伝うようになりました。

遊びとしては、お正月の凧揚げや独楽回しなどはしたけどね。とにかく当時、この辺りは我が家が山の上に一軒あるだけで。本当に寂しかったですよ。どうしてこんなところに家を建てたのだろうって思った。でも下の方には農家もあつたし、友達も下の方から上がってきてくれて一緒に遊んだからね。山の中をかけずり回ったり、チャンバラごっこをしたり。遊ぶ仲間は5~7人くらいで、女の子もいたね。そのころはプールなんてないから、川で泳ぎました。下の有馬川で泳いだり、魚釣りをしたり。泳ぐのは田んぼに水を引くための堰があつたから、そこで。魚も釣ったね。フナやコイ、ハヤあたりがよく釣れたね。釣るのが楽しみで食べたことはなかったけどね。

小学校は野川小学校です。学年は1クラス58人の2クラスだったね。昭和19年に入学して小学2年生のときに終戦でした。

終戦後に東京から町の人が焼け出されてきたから、子どもも増えたのかな。

◆戦中戦後

子どものころ、買い物はほとんど酒屋だったね。久末のバス停のところにあるコンビニには、以前は酒屋だったんですよ。酒屋といっても何でも屋でね。当時はその店一軒しかなかったから、この辺りの人はそこに買いに行ってたね。お醤油や味噌は自宅で作っていて、一年に一回、醤油絞りの人が来てくれたのを覚えていますよ。

今と違ってあの頃は皆、貧しかったと思うね。この辺り一帯には家がなかったし、ここからは南武線の駅舎も見えてました。戦争中は空襲にも会いました。空襲が激しくなり、学校もお寺に分散して勉強していて、わたしは妙法寺に行きました。あそこが近いからね。

さらに空襲が激しくなったので近くの防空壕に逃げました。わたしは一番臆病だったので、防空壕でも一番奥に陣取って。高射砲陣地があって、あの音がすごかった。防空壕の前に爆弾が落ちて亡くなった人もいたね。

父親は陸軍補充兵として30歳過ぎてから徴兵されました。南方のフィリピンに配属されて、この辺りの人も南方に行った人が多かったね。帰ってきた人もいたけど、帰ってこられなかった人もいましたよ。父が復員したあと、家族の人が戦地の様子を

聞きに来られた方もいました。私の父は戦後すぐに引き揚げてこられなかったそうで、数ヶ月たってからひょっこり復員してきました。軍服を着て立っていたのを覚えています。戦地では野営というか野宿していたから、向こうで南方特有のマラリヤに感染して、家に帰ってきてからもしばらくは仕事が出来なかったね。

◆戦後の暮らし

小学校を卒業して中学校は日吉の日本大学中等学校へ入学しました。先生から「私立中学に行かせなさい」って言われてね。先生に勧められたから父母も喜んで、無理してでも行かせてやろうって。わたしも上の学校（大学）にも行きたかったし。その頃手広く農業もやっていたから、ちょうど住み込みで農業の仕事をしてくれる秋田出身の若い男の人が来てくれてね。本当に助かりました。でもほどなくしてサラリーマンの仕事が見つかったとかで突然辞めて行ってしまったのですよ。やはり農家より良かったのでしょうかね。最初は私が大学を卒業するまでって約束だったのだけれど、男の人が辞めてしまったので、結局私が学校を卒業したら、農業をやることになったのです。

その頃はお米と麦、野菜もたくさん作っていましたね。でも現金収入も必要だったから、養豚もはじめました。多いときには70～80頭も飼っていました。当時のエ

サは、東京の方から一日置きに残飯をもらってドラム缶に入れて運ぶのです。オート三輪でね。この辺りの農家もほとんどが豚を飼っていました。昭和40年頃からは近所に人も増え、県営野川南台団地ができて、臭いの問題などもあって養豚は辞めざるを得なくなったのです。昭和50年近くまでは飼っていたね。いずれにしても団地が出来た当時はまだ、ここで豚を飼っていましたね。



◆近隣の移り変わり

都会に人が集まるようになると住宅が必要になるから、このあたりも県営住宅ができたり、東急が野川台の開発をしたりで急に人も家も増えていったね。新しい人がずいぶん引っ越してきましたよ。町が大きく変わりましたね。

最初、住宅じゃなくて実験動物中央研究所というのができたのです。この辺じゃ「鼠の研究所」って言っていたけどね。団地が出来前だから昭和30年代だったね。今

は、その場所は介護施設になってしまっていますよ。

この辺りは昭和40年代ごろまでは井戸水だったけれど、県営住宅ができてからは水道が引かれてね。おかげでいろいろ便利になってよかったですよ。

◆お祭りと青年団

地元の野川神社は元々10月12日が祭礼でね。今は暦の関係で体育の日が祭礼になっています。青年団で御神輿を担いで、縁日もあって楽しかったね。一時期は地元の青年団はお芝居もしなくてはならないから皆で練習していましたね。女の人たちもやっていたね。私たちの頃はもうお芝居はなくなっちゃったけど、御神輿は担いだね。今は「野川音頭」があるから、盆踊りも楽しいね。

お祭りといえば、影向寺にもよく行きました。子どもの頃の縁日はすごかったですよ。露店が出て人がごった返して、世田谷のボロ市と匹敵するくらいの賑わいでした。曜日に関係なく12月11～12日に決まっていて、学校が終わるとお小遣い握りしめて大急ぎで行きました。

うちは影向寺の檀家で、昔は檀家が36軒しかなかったけど、今や400軒になったのだからずいぶん増えたなあと思います。お正月のしめ飾りも影向寺で揃えます。

◆農業以外に続けてこられたことは

私は学校時代から「学級新聞係」をしていたので、新聞を作ることや広報関係の仕事は好きでした。ガリ版でね、ガリ切りは先生がやってくれて、記事とか割り付けは生徒がやってね、手を真っ黒にして謄写版で仕上げました。

青年会に入り、そのあと宮崎青年団を結成してそこで文化部長をやり、機関誌「宮青連」を発行しました。また、川崎市の青年団連盟の文化部長として機関誌「川青連」の発行に係りました。そのあとセレサ川崎ができて広報誌の編集委員をやりました。そのあと、社会福祉協議会の広報部会長をやり、広報誌「にじ」の発行に係りました。

あとは町会長や保護司（23年間）、消防団に青年団にPTA、いずれも長いこと続けましたね。

短歌を詠むのも好きだったね。機関誌にも掲載していただいて記念になりました。大抵は孫のことを詠んだ歌です。

「しろがねも こがねも たからのいつ
なれど 我が家の宝、初の孫かな」

「孫の日の すみたるごとし 五月晴れ
薫風受けて 泳ぐ鯉かな」

女房が逝ってからは短歌もやめてしまったけど、書くことが好きなので演歌の歌詞をたくさん書いています。恋の歌とかね。

歌に詠んだ初孫も今は19歳になりました。この家は私で十四代、庭の糸ヒバも樹齢250年になります。どんなに時代が変わってもたくましく生きて行ってほしいね。そしてこのあたりが事故や犯罪のない安全な町であってほしいと願うね。



<和田さん宅の糸ヒバ 樹齢250年>

(平成28年6月13日取材)